

黒姫山と石黒の昔の暮らし

今年の五月に残雪の黒姫山の地蔵峠を越え故郷石黒に向かった。

この道はかつては、通称「松之山脇街道」と呼ばれ、柏崎から折居、上石黒、落合、居谷、小貫、寺尾を経て本街道（松之山街道）に接合する重要な道路であった。

折居の拝庭で車を降りて上向集落内の道を上って行くと、にわかには、視界が開け真正面に黒姫山の雄大な姿が迫る。この近くにはミツガシワの自生地がある。水位の変化を嫌うこの植物をはぐくむものは池底から湧く黒姫山の豊かな水源である。

そこから、小川に沿った農道を百メートルほど進み、黒姫登山道入り口を左に見て右に折れて山道に入る。雪解け水が音を立てて流れ下る沢沿いには、ホクリクネコノメソウやアズマシロガネソウが

目を引く。

しばらく歩き沢の水音が遠ざかる頃から山道はやや斜度を上げながら尾根筋へと蛇行して上っていく。尾根筋に達する眼下に女谷・折居集落が一望できる。

藩邸庄屋からの独立

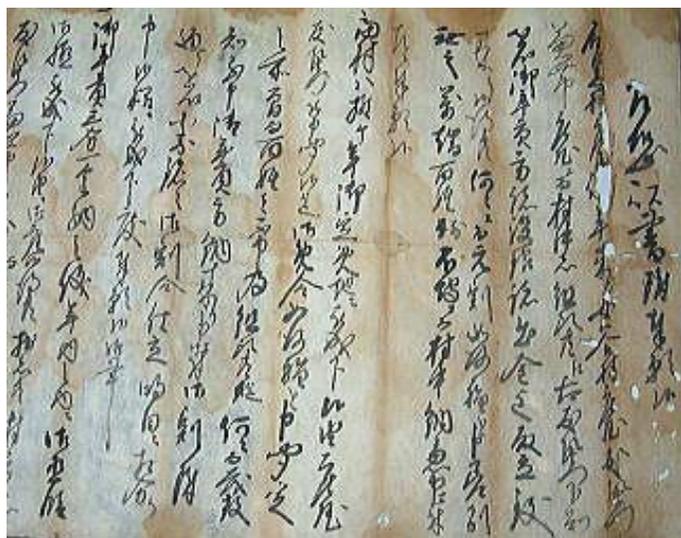
かつて、石黒はここ女谷村の庄屋の支配下にあった。

一六八三年（天和三）の検地帳の表紙には「別俣郷 女谷村の内石黒村」と記されている。

この時代の石黒村の戸数は名寄帳によれば二十八戸ほどであった。

しかし、一七〇二年（元禄十四）には六十戸に倍増している。更に五十年後の宝暦四年には百二十六戸と倍増を重ねている。これだけ戸数となると共同体としての力も付き自治意識が高まることはいうまでもない。

左の古文書は、石黒村が脇野町代官所に提出した庄屋分離の願い書の写しである。



分離願いの理由として、庄屋の年貢の不等なる割当の他に、この地蔵峠を越える両村を結ぶ道のりは十二町余あり、特に冬季は危険が伴うことを上げています。

降雪期にはおそらく尾根筋づたいに上り下りしたものであろう。実際に明治以降の悲しい遭難事故も何件か今も語り継がれている。

しかし、石黒村の悲願であった兼帯庄屋からの独立が実現し、石黒村に庄屋が誕生したのは、実上記の願い書が出されてから数十年後の（明和五）のことであった。

身代わり地蔵

さて、折居集落を一望できる場所からは少し上ると尾根づたいの細い道に出る。道の左右は険しい絶壁である。近くには馬頭観音らしい小さな石仏が見られる。荷鞍に米や塩をつけた馬がバランスを崩して転落死することも時々あり、牛馬の道中の安全を祈願した石仏であろう。

尾根道を通り過ぎると平らな少し広い場所に出る。日当たりを好むスキヤワラビが目につく。頂上までの中間地点であるこの場所で、昔から人も馬も一息入れたものであろう。

その先は、灌木の斜面を横切って道は山ひだの奥に入り込み、沢に沿った坂道となる。この沢は「マキノサワ」と呼ばれ夏でも水量がほとんど減らない。ここにも、昔から、水山（みずやま）とも呼ばれた黒姫山の豊富な水源がある。

沢沿いに生えた巨大なサワアザミが目を引き。このあたりにはその他、サンカヨウ

など珍しい野草も多く見られる。

また、マキノサワの水源のすぐそばの道上に一体の地蔵が祀られている。昔は、このような石仏が地蔵峠の道には五、六体もあつた。



特に頂上のお堂の中に祀られている地蔵は「身代わり地蔵」と呼ばれ、次のような伝説によって今に語り伝えられている。

昔、峠越えの女の人が、地蔵峠の頂上から折居に向かって少し下ったところで一人

の浪人に乱暴されそうになった。浪人は、逃げる女を追いかけて刀を抜いて袈裟懸けに斬りつけた。切られた女の人は気を失って倒れた。

女の人が我に返ると、切られたはずの肩から背中にかけて傷ひとつなかった。不思議に思つて周りを見渡すと近くの草むらに、一体の石地蔵が倒れていた。その石地蔵の、肩から脇下に斜がけに真新しい割れ目が入つていた。

女の人は、この地蔵様が身代わりになって自分を救ってくれたと信じて、峠の頂上に安置して毎日拝み続けた。すると、不思議なことに長年病んでいた持病も治つた。

以来、近在の村人から「身代わり地蔵」と呼ばれ、特に腰から下の病いに靈験ありとされ信仰されるようになったという。

戦後、熱心な信者たちが御堂を建て、そこに石地蔵（石祠には宝永元年の刻字が見られるという）を安置し現在に至っている。村人から「峠の地蔵さん」と呼ばれて親しまれ崇拜されてきた。

昔は毎月四日、十四日、二十四日に地蔵尊にお参りに上つたものだという。

その後、春祭りは七月四日、秋祭りは九

月四日と決めて行ってきたが、昭和の終わり頃から秋祭りのみ行われるようになって現在に至っている。

祭礼の参拝者は主に柏崎市の石黒や折居の人々であるが遠く十日町市松代などからも訪れる信者もある。また、当日は神主を招いてお祓いをしてもらう慣例である。

ところで、このように地蔵峠には頂上の地蔵尊堂を初め多くの石仏が道沿いに多く見られることは、何を物語るものであろうか。

それは、とりもなおさず、四百年以上にわたりこの峠道が石黒村のみならず当時の松代や松之山、嶺村などの生活を支える道路であったということであろう。今日、この道が「塩の道」と呼ばれる由縁である。同時に、その道中には多くの困難が伴ったことを物語るものでもある。

昼夜に関わらず、時には暴風雨や吹雪の中でもこの峠を越えなければならなかった。とくに、冬季は雪崩を避けるために尾根づたいに上り下りしなければならなかったため、峠越えは困難を極める。

出稼ぎ先から正月に帰省した村人三人が集落の灯りの見えるところまで来て吹雪き

のため遭難したのは、それほど昔のことではない。今でも、遭難場所には供養碑が立っているが、ここまで来て何故と不思議に思うほどの場所である。しかし、いかに大声を上げて助けを求めても黒姫山を吹き下ろす猛り狂う吹雪の音にかき消されてしまったにちがいない。

峠越えをする人達は、道々に祀られた石仏に手を合わせて心から道中の安全を祈ったものであろう。

花坂新田

お堂のある頂上から石黒への峠道を二十mほど下ると、にわかには広大な景色が眼前に広がる。

何層もの山脈の奥に、長野黒姫、戸隠山、妙高、火打山、焼山などが望まれる。特に早春や晩秋の雪山は美しい。海拔六百五十mとはいえ真に壮大な眺めである。

数百年に渡って、この峠道を通った人々の多くは、ここでしばしば歩みを止めてこの広大な景観に見入ったものであろう。

また、眼下に目を移すと未だ残雪が所々に見られる棚田が広がっている。一九九九年に日本棚田百選に選ばれた花坂新田である。

花坂新田は一八〇三年(享和三三)に柏崎町の山田為四郎の資金により十年の歳月をかけて完成した。

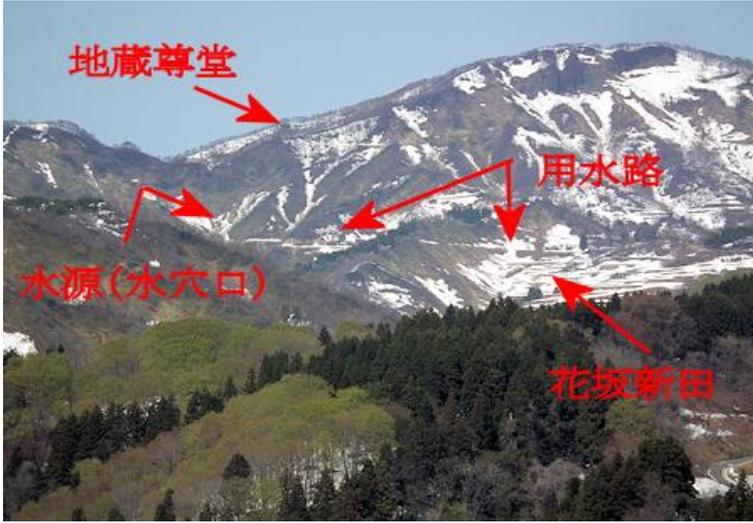


江戸時代前期には全国各地で新田開発が急速に進められ、現在の高柳町の殆どの村々でも新田開発が行われた。特に辺鄙な場所にある石黒でも開発が進み、一七七六年(安永五)には、石黒村は両隣の折居村、嶺村と連名で出雲崎代官所に宛て、当地にはもはや開発の余地は無いという趣意の文

書を提出している。

ところがその一八年後の寛政六年に柏

崎町の山田為四郎と文書を取り交わして新田開発を計画したのである。



それは、地蔵峠からやや西寄りの、地名「水穴口」に「一升口」「二升マスほどの太さの水量の湧き水」と呼ばれる豊富な湧き水があり、長い用水路さえ作れば未だ黒姫

山沿いに新田開発の余地はあったからである。

高柳町史によれば花坂用水の水上、水 downstream 合わせて灌水面積は十六町歩に及びその江丸(用水路)の規模はおよそ二mの幅で三mにも達したという。

こうして開かれた新田は、その後、徐々に村人に売り渡され、「相譲申田地証文之事」の表題の山田為四郎名義の古文書が今も多くの家で保存されている。

また、古老の話によると、昔は花坂新田を「山田新田」と呼び、収穫後に、ここで納める米の値段がその年の石黒での米相場の基となったものだという。

花坂新田は、現在(二〇一一年)では、ほぼ全部が耕作され、眺望にも恵まれた棚田であることから早春から晩秋まで写真家が訪れている。

だが、今後、過疎化にともなう高齢化がこのまま進むとこの景観を維持できるかどうか危ぶまれる。

石黒の現在の耕作者の平均年齢は七十才を越えている。若い後継者が得られない現状では、十年後、二十年後の見通しも立たない。

今、眼前の美しく整備された花坂新田が茫々たる原野に還った光景を想像するだけで背筋が寒くなる。

その時には、この地蔵峠の古道も鬱蒼たる灌木におおわれてその跡をとどめることもないであろう。

しかし、一昨年に発足した農事組合法人・石黒は「せめて現在の耕作田をこの十年、そして二十年にわたり残したい」と活動に取り組んでいる。また、広く県外からボランティアの人々によって花坂新田の一部が数年まえから耕作されている。

こうした取り組みが今後、多くの人々の共感をえて力を結集して行くことを願わずにはられない。

峠を下って花坂新田の水路に下り立つと、写真家らしい身なりの人が三脚を据えて残雪の棚田にカメラを向けている。

声をかけると、新潟市からやって来たという。「この棚田風景は最高ですね。年三回は撮影に来ますよ」そう言いながらも彼の視線は眼前に広がる棚田から離れることはなかった。

〔編集会〕

※市民文化誌「風の色」五号より転載